



アルコール依存症の 治療ターゲット

4

専門医療機関における治療ターゲットの考え方—古典や格言に習う断酒と減酒、治療目標—

How to choose treatment options for alcohol use disorder, either abstinence or reduced drinking, in medical setting specialized in addiction, using concepts of proverbs and/or classics



藤田医科大学病院
国際医療センター

田中 増郎
Masuo Tanaka

名古屋医専

長 徹二
Tetsuji Cho

慈圭病院(院長)

堀井 茂男
Shigeo Horii

Summary

アルコール依存症(使用障害)の専門医療機関での治療の対象者は多岐にわたる。近年は偏見低減のためか、早期の受診が増えている印象がある。さらに、年齢層や状態像においても、幅広い層が受診している。2018年発行の「新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドライン」(以下、新ガイドライン)¹⁾には、アルコール依存症の治療方針が断酒だけにとどまらず、減酒も選択肢になることが示された。つまり、身体合併症が軽症な人だけではなく、治療を中断するリスクがある場合にも、個人や家族の状況も考慮して、治療選択を行っている。

断酒か減酒という二分法のみには囚われるのではなく、その方針が目的ではなく手段であることを念頭に入れ、できるだけその人の幸福や生活が楽になることを目指すことが望ましい。何がベストな方法かは、スポーツで「どうすれば絶対勝てるか」という命題に類似し、そのような秘技はない。だからこそ個々に応じたよりベターな方策を総動員して、治療者は悩み続けるしかないのである。



Key Words

アルコール依存症, 断酒, 減酒, ハームリダクション

はじめに

アルコール依存症(使用障害)の専門医療機関における治療ターゲットは、おそらく「相談を希望されているすべての人」であり、依存症を抱える本人のみならず、その家族のケアも必要であると考えている。そして、断酒と減酒の治療目標設定の方法については、「新ガイドライン¹⁾に準じて決定するが、分け方の明確な設定は受診した人やその家族、現場の状況によってさまざまであり、定石はない」と述べるができる。つまり、原則的には断酒を選ぶことが望ましいが、治療

継続を目指すために当初は減酒を選ぶことも有り得る。しかし、その選択は簡単には決定できるものではない。

この選択方法については、受診した人の主体性を重視するほか、フローチャートでの診断および治療の選択¹⁾などの方法が解説されている。ただし本稿においては、今回は方法論よりも、軸となる考え方について述べる。具体的には治療目標設定のために、以下の5つの古典や格言を紹介する。これら先人の知恵を、筆者らは依存症医療のなかで己の戒めとしている。戦や争いごとに関することを主に取り上げていくが、平和を保つためにあえて極限状態の教訓を生かしたい。